

第2回 徳島県いじめ問題等対策審議会 議事録

日 時 令和4年9月16日(金) 午前10時から正午まで
開催方法 オンライン会議システム
出席者 15名
会議概要

- 1 開会
 - (1) 教育委員会あいさつ
 - (2) 会長あいさつ
- 2 議事
 - (1) 今年度の取組「つながり リレー動画」について
 - (2) 不登校の児童生徒の支援について
- 3 閉会

会長あいさつ

お忙しい中、全員の委員に御参加いただき、ありがとうございます。新型コロナウイルス感染症が収束せず、マスク生活が続いている。去年の夏頃は、来年はマスクを外し文化祭、体育祭を楽しもうと思っていたが叶わず、大人数で楽しむことが難しい状況が続いている。夏の暑いマスク生活も早く涼しくなってほしいと思いながら、テレビを見ると、ある番組で中学生がお付き合いをしている人のマスクを外した顔を見たことがなく、初めてマスクを外した顔を見るという内容の番組だった。「こういうことか」と思った。

子どもたちは入学した時からマスクをしており、その顔しか知らない。番組ではマスクを外し顔を見て良かったということで終わったが、聞いた話では、マスクを外した顔を見て、「そんな顔だったんだ」と言われ「学校に行きたくないと思った」というものがあった。マスク生活が早く終わってほしいと思う。

この審議会では、徳島県のいじめや不登校が減少する話し合いができればと思う。

事務局 会長に進行をお願いする。

会 長 協議1の今年度の取組について、「第1回いじめ問題等対策審議会」以降の経緯と、「つながり リレー動画」について、事務局に説明をお願いする。

事務局 第1回審議会では、委員の方々から、児童生徒が「コロナ禍で人間関係が作りにくい状況がある」、「人とのつながりを大切にしよう」と考

えることが大事だ」等の御意見や、「子どもたちの絆が深まる取組が必要ではないか」という御提案をいただいた。

これらの御意見等を踏まえ、今年度の取組として、「身近な人とのつながりの大切さ」を実感できる動画を児童生徒から募集し、配信する方向で、去る8月9日「第1回いじめ問題等対策検討部会」を開催した。

検討部会では「つながり リレー動画」実施要項案について、各委員から募集動画の内容や応募方法等について、御意見等を頂いた。

事前に配布した「つながり リレー動画」実施要項を御覧ください。

目的は、コロナ禍により人と人とが繋がりにくい状況が続いている今だからこそ、子どもたちの豊かな発想を生かし、「身近な人と人とのつながりの大切さ」をテーマにした動画を制作し、発信することで、人とのつながりの大切さを実感し、積極的に人と関わろうとする意欲や態度を育成する。募集期間は、令和4年9月1日から令和4年11月30日まで。動画は2分以内にまとめる。毎月5本程度の動画をつなぎ合わせて「つながり リレー動画」として徳島県のホームページ等を通して発信する。

配信期間は10月から1月までの4ヶ月間の予定。2月に配信する動画「大人からのメッセージ」は事務局に御一任いただきたいと思う。以上で「つながり リレー動画」の御説明を終わる。

会 長 このことについて、部会長から御意見をいただく。

部会長 最近動画が若い人たち、特に小・中学生の間で広がっており、文字よりも動画という取組はたいへん新鮮で良いと思う。

他にも、動画は出演者や保護者の同意を得ているか、音源もフリー音源であるか、許可をもらっているか、写真等を使う場合も慎重にお願いしたいと伝えた。もう1点、課題として1人1台端末を使うことである。これは当然だが、動画の編集はライン等を使うとすごく楽で簡単である。ただ、教育委員会としては、小中学生のスマホの持ち込み禁止や、高校生にもその端末を注意して使用するようお願いしているので、なかなか踏み切れないところだと思う。要は使い方の問題である。全体的には新しい試みなので一生懸命気をつけてやりましょと申し上げた。

会 長 小中学生、高校生は本当に動画が身近で、活字よりも動画を観ることが多い。今回の取組は新鮮で、馴染みがあり良いのではないかと。部会長の話にあったようにメディアリテラシーの問題も、先生たちが関

わっていくことで良い課題にもなる取組だと思う。

「つながりリレー動画」についての報告があったが、委員の方からこれについて意見や感想等はないか。

委員 たいへん良い企画ができたと思う。完成した動画を多くの方に観てもらいたい。どのように広報していくかが大事。学校の先生も忙しいので、うまくアピールしていかないと取り組んでもらえないのではないか。動画のPRについての工夫はあるか。

事務局 PRは、各学校に実施要綱と広報チラシをメールで送付し、周知するとともに、全ての小中学校、高等学校に広報チラシを配布している。また、教育委員会人権教育課のホームページ及び総合教育センターのホームページ上にも広報用バナーを設けており、アクセスできるようにしている。

委員 チラシは各学校の児童生徒一人に一枚届いてるのか。

事務局 各学校宛に送っている。一人一枚ではない。

委員 子どもがチラシを見ると、面白そうだと応募してくれるのではないか。文化祭が終わり、イベントが少なくなってる時期に、こういう動画作りはたいへん良いと思う。子どもたちにどのように届け、先生方にどうすれば観てもらえるのか工夫してほしい。

委員 教育委員会はLINEの公式アカウントを持っている。友だち登録も以前より増えていると思う。LINEを通して情報発信してはどうか。

会長 子どもたちもアクセスできるものなのか。

委員 アクセスできる。友達登録が必要だ。

会長 学校にポスターやチラシを貼る方法がある。委員には学校の先生がいるが、どのような周知ができるだろうか。

委員 勤務校では、生徒たちには学級掲示や各委員会ごとの目標を発表する時間を通して周知する。先生が関わらなければ提出できない条件もあり、先生方にもお願いするが、忙しく難しい状況がある。生徒会に直接お願いしたり、部活動単位でお願いしたいと考えている。

会 長 先生方にも積極的に関わってほしい。どのように広報し観てもらうのが大事である。広く皆さんに観てもらいたいと思う。

委 員 大学では学生募集も含め、学祭の時もそうだと思うが、SNSでなければ学生に情報が届かない。SNSを活用し、周知をするのが良いのではないかと。GDNやYouTubeを使い、周知する等、様々な方法があると思う。紙媒体は子どもたちに届かないと思う方がよい。例えば、Instagramを利用してはどうか。教育委員会は使用していないかもしれないが、使い方の問題であって、SNSは普通に誰もが利用している。リテラシーの問題も含め、周知の方法については、学生の委員の意見も聞きたい。

委 員 基本的には手紙やそういう形式のものは、一緒にまとめ、どこかにいってしまい、重要ではないと子どもたちが判断し、ゴミ箱へいく可能性が大きい。私は高校生ではないので感覚が違うかもしれないが、時間の確認もスマートフォンで済ませる。空き時間はツイッターを見るという人が多い。SNSを利用しての周知は、子どもたちが意欲的になるのではないかと。参加したいと感じることにもつながる。

会 長 教育委員会にはインスタやツイッター、YouTubeのアカウントがあるのか。それらで広報は可能か。

事務局 LINEのアカウントは持っている。積極的に検討したい。それ以外のSNSは教育委員会にはない。今話題になっている周知・啓発が一番の課題と認識している。紙媒体が伝わりにくいという現状を踏まえ、直接的に先生方のパソコンに要項やチラシ等を送っているが、継続した周知を考えている。一方で、先ほどの話と逆行するが、あえて紙媒体で学校に送付しているところだが、他の方法についても今後検討していかなければならない。

会 長 検討していただき、子どもたちに届くものになればと思う。子どもたちが制作した動画を、保護者や地域の方が観て、「すごくみんな楽しそうだな」と思ってもらえることが大切である。広報をさらに充実してほしい。

委 員 新聞やテレビで広報すれば、保護者から「うちの子も参加してほしい」という声が出てくると思う。思い切ってメディアを使って広報してはどうか。

委員 勤務校では、早速「つながり リレー動画」の配信に向けて、児童会で子どもたちと一緒にどのような動画を配信するか検討する予定である。子どもたち自身もやる気満々だ。

自分の学校で撮影をすると子どもたちもより観たくなる。御家庭でも観てもらい、地域に広がっていくという形もある。まず、自分たちで撮影するところが今回の取組の良さと感じている。学校のホームページで周知すれば一気に広がり、保護者や地域の方に紹介できる。

委員 プレスリリースをすれば教育委員会の取組として、広報してくれると思う。新しい試みということでメディアに呼びかける。

委員 本当に楽しそうな取組みだ。こういったことが好きな子どもも多いと思う。

応募作品の規格で「動画はMP4形式」と記載があるが、この形式を知らない子どもも多い。先生方からの周知や、これに詳しい保護者の呼びかけ等で、子どもたちが意欲的に取り組めるのではないか。明日、県P連の会があり、参会者に「つながり リレー動画」を紹介し、多くの作品が応募されるようにしたい。

委員 高P連の会でも実施要項等を紹介する。また、PTAから先生方にお勧めしたいと考えている。すごく良い取組みだと感じている。

会長 応募多数の場合どうするか。全て配信してほしいがどうか。

事務局 全て配信したいと考えている。予定している10月から1月の配信期間の延長も想定している。

委員 内容に関して賛同する。募集作品の内容例を見ると、いじめ問題の対策として利用できるだけでなく、学校教育の様々な場面で貢献できると感じているが、各学校でしっかりした作品が制作できるかどうか。早い時期に応募できるなら、なお良いと思う。今回だけでなく来年度も継続してはどうか、その際には夏休みに募集し、9月から配信できるよう早い時期の応募を望む。

会長 夏休みの課題として子どもたちが取り組むことができる。

委員 この企画を見た時に、参加することでふれ合い、コミュニケーションが生まれ、つながりを実感することが増える。観ることもそうだが、参加し触れ合うということで広がっていくと思う。学校では先生方が

サポートしていくことが多く、小学生ではサポートの量も増えるが、高校生はある程度任せて制作できる。学年に応じてサポートも違ってくる。その中で、「作っていこう」という輪が広がることになると、つながりを実感できる子が増える。こういった取組が広がると、いじめについての草の根活動のような形で、子どもたちに思いやりの気持ちが広まると感じた。

会 長 制作することにより、子ども同士の交流が深まると思う。

委 員 高校生は動画の撮影や編集に長けている。本校ではコロナの感染対策もあり、文化祭で今までは舞台上でクラスで劇等をしていたが、それもすべて事前に生徒たちが動画撮影をし、放映するという形をとっている。自分もクラス担任をしているが、すべて生徒たちがLINE等を使い撮影して動画編集まで行っている。「つながり リレー動画」も生徒たちがいろいろな案を出し、高校生なら基本的にはタブレット等を使い自分で撮影と編集もできると思う。本校でも部活動やクラス委員会単位等、動画撮影に参加してくれる生徒がいると期待している。

委 員 良い企画だが、SNSの活用について心配なことがある。撮影に当たり、グループ単位、友達同士では、あまり心配はないと思うが、クラス単位、委員会単位であると一定数やりたくない人もいないか。やる気がある人、率先してやりたい人、あまりやりたくない人、という中でいさかみや揉め事が起こったり、どうしても委員長等に負担が集中しないか心配である。

会 長 先生方が関わることが大事である。絶対やらないといけない訳ではない。出たい人、出たくない人もいる。いろんな形で参加できたらよいのではないか。これがきっかけで問題が起きたり、いじめになってはいけないので注意が必要である。

委 員 すごく楽しそうな企画である。是非観てみたいと思う。応募がたくさんあればよいと思う。子どもたちに会う機会があるので、いろんな関係者の会や子どもたちにPRしようと思う。

委 員 良い企画と感じている。今の生徒たちの中でも興味がある、そのど真ん中をついてるような感じがする。来年以降も是非続けてほしい。

委 員 皆さんの意見を聞いて納得することばかりだ。周知方法として、学校が保護者に配信しているマチコミメールを活用してはどうか。リレ

一動画をするとか、PR動画があるということをマチコミメールで周知すると簡単に保護者へ伝えることができる。

また、学校で相談を受ける中で、ふだん学校に登校できないが、文化祭や修学旅行等には来れるという子もいる。この動画作りの機会があることで、SNSを使い動画編集するのが得意だという子が、これをきっかけに学校とのつながりができたら良いと思う。いろんな面で、良い効果がある気がする。

委員 企画としてとても面白く良いと思う。積極的に参加する子もいるし、消極的な子もいるので、いろんな人がいて、役割を実感したり、外には出てこないが、つながりを感じることで、きっといいだろうと感じた。このようなきっかけを通して、外に出なくても、何かのきっかけでつながってる。案と一緒に考え、それに対してありがとうと伝えることもできる。

一点だけ、気になることがある。募集作品の中で学校祭のような多くの子たちが出てくる場面では注意が必要である。教育委員会でチェックをしているので大丈夫と思うが、全体のところで、手を挙げた人以外の人が出るような場合に配慮が必要である。

会長 映りたくない人もいる。各学校で注意していただき、教育委員会でも確認していただく。

事務局 作品を提出する際に担当教師からのチェックリストの提出をお願いしている。内容は、「出演者の承諾を得ているか」、「映り込んでいる人物全員の許諾を得ているか」、「個人が特定できないように映像処理を行っているか」、などの項目を設けており、それを基に事務局でもチェックできるようにしている。

会長 以上で協議1「つながり リレー動画」についての協議を終わる。人と人をつながることで、希薄になってる人間関係が改善し、子どもにも様々な特技があるということを広く知っていただきたい。そして、「学校が楽しい」ということにもつながり、不登校のお子さんも参加することで学校に行きたいと感じてほしい。

会長 次の協議、「不登校の児童生徒の支援」について、委員の皆様にご意見をいただきたい。関連資料について、事務局から説明がある。

事務局 資料、「徳島県の国公立小・中学校、高等学校、不登校児童生徒数を御覧ください。」「文部科学省 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指

導上の課題に関する調査結果」に基づき作成している。

折れ線グラフの一番上の線が小・中学生、高校生の不登校児童生徒数を表しており、不登校の児童生徒は年々増加傾向にある。令和2年度は過去10年間で最も多い1,174人となっている。不登校児童生徒は全国的にも増加傾向にあり、学校現場の大きな課題となっている。

不登校の要因は多様で、ストレスや不安等、悩みを抱えて生活している児童生徒が増加していると考えている。特に令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、生活環境が変化し、生活リズムが乱れやすい状況になったことや、学校生活において様々な制限があり、交友関係がうまく築けなかったことなどにより、登校する意欲が湧きにくい状況となったことが増加の背景として考えられる。また、家庭内で、SNSやゲーム等が急速に普及したことや、学校に復帰するだけを目指すのではなく、社会的自立を目指すという考え方が社会全体に広がってきたことなども増加の要因として考えられる。

事務局

教育支援センターや民間施設を利用する児童生徒数も増加をしている。その要因については多様化しており、個別ニーズへの対応が必要である。また、学校復帰だけに限らず社会的自立を目指し、全ての児童生徒の教育機会の確保に向けた取組が重要である。

県では令和3年度まで「適応指導教室連絡協議会」を開催し、県内教育支援センターの連携に努めた。令和4年度はさらに効果的な支援の充実を図るため、教育支援センターのみならず、市町村教育委員会の不登校支援の担当者、民間団体等にも参加をいただき、教育支援センターの機能を一層強化し、民間施設等との積極的な情報共有や連携を目的とした「徳島県不登校に関する児童生徒支援協議会」として名称を新たに開催した。

本協議会では、大学教授にアドバイザーとして参加を頂き、教育支援センター、民間団体等の活動の実践報告、意見交換を行った。

意見交換の中で学習の支援や活動内容についての工夫や悩み、ICTの活用や学校との連携方法についての質問等があった。民間団体の方からは、様々な関係機関との連携、情報共有の必要性等について御意見をいただいた。

会長

資料の説明について、質問等はないか。

委員

民間団体と一緒に開催したということに関心がある。民間団体はどこが参加したのか教えていただきたい。

- 事務局 6団体に参加いただいた。
- 会長 次に、不登校の児童生徒の支援の手立てとして、昨年度審議会において「段階別 不登校対応ハンドブック」を改訂した。その活用について、学校関係者の委員から状況を聞きたい。
- 委員 年度初めにハンドブックを全職員に配布し、活用について周知を図っている。学校に行きづらいお子さんや、そうなるサインを見逃さないように、職員で共通理解を図りながら、組織的に対応できるよう努めている。
- 活用状況については、ハンドブックを参考に職員間での情報共有やチェックリストの活用を行っている。また、子どもの小さな変化にも気づけるような、指針としても活用できる。関係機関への連絡先についても掲載されており、若手の教師からベテランの教師まで、たいへん有意義に活用できている。
- 委員 それぞれの職員が必要に応じて活用していると思う。「君のこと教えてシート」が生徒にとって分かりやすいような形になっている。
- 以前から「学校生活アンケート」を実施しているが、子どもの小さな変化に気づこうと思い、ハンドブックのチェックリストもそうだが、日々の日記を見ても、ちょっとしたことに気づくことが多いと思う。
- 学校生活をよく観察したり、コミュニケーションを取ることが一番大事である。若手の教師も多く、ひとりで悩まないように、メンター制度も活用し、若手とベテラン教師、ミドルリーダーがしっかり連携し、お互いにサポートし合っていくことが大切である。
- 会長 「君のこと教えてシート」はスクールカウンセラーも活用している。
- 委員 養護教諭がハンドブックを活用している。私自身も不登校の生徒を担当したことが何度もあり、ハンドブックの相談機関のリストを活用している。総合教育センターのホームページからも必要なページをダウンロードできる。
- 「君のこと教えてシート」は、イラストに変化がないので、高校生向けに改善されるとさらに活用できるのではないかと思う。また、チェックリストを見て、子どもが私に何か発信をしていたのではないかということ振り返る機会ともなる。今後もハンドブックを活用したい。
- 会長 他に御意見や感想はないか。

委員 「段階別 不登校対応ハンドブック」（改訂版）を多いに活用していただきたいと思う。棚の中に眠らせることがないように、管理職の姿勢が問われるところだと思う。立場上、24市町村にも発信していきたい。

会長 管理職に活用を勧めてもらうことが大事である。

委員 ハンドブックについて、スクールカウンセラーにも周知し、しっかり意識しないといけないと思う。

初任者研修にもスクールカウンセラーの職務説明の時間をとっている学校もある。学校のスクールカウンセラーと初任者の教師が話をする、スクールカウンセラーの活用についても知ることができる。そこで顔見知りになると、気軽に相談できる関係が構築される。また、それが問題の早期発見や未然防止につながるものが結構ある。仕組みを知ることが大事である。

ハンドブックについては、紹介することが通例になると良いと思う。

委員 スクールソーシャルワーカーでも統一した支援を提供するために、ハンドブックについて全員が把握することが大事である。

スクールソーシャルワーカーの市町村配置が開始して6年程度、新規のソーシャルワーカーも増える中で、一年目のソーシャルワーカーは不登校の児童生徒や担任との関わり方等が手探りという話も聞く。ソーシャルワーカーもハンドブックを全員が一読し、教師にも提案できるようにする。ソーシャルワーカーと教師が同じ視点に立つことが大事である。

会長 ハンドブックには家庭訪問や関係機関との連携についても記載している。

次に、「不登校児童生徒の支援」について、好事例や提案はないか。

委員 不登校生徒の事例で、中学校に入学した時に誰も友人がいない状態だったが、一人の生徒がその子に声をかけたことで、その子が次の進路に対する夢や希望を持っていることが分かった。しかし、不登校になった理由は分からない。不登校の要因は多様である。子どもの気持ちを理解すること、カウンセリングが保護者に必要な場合もある。

会長 友人ができることは心強い。カウンセラーも活用してはどうか。

委員 審議会での不登校についての協議が、この場限りでなく県や学校で

なされるべきだ。この協議がどの様に波及していくのか、影響があれば良いと思う。不登校は個々の問題にされがちだが、いじめ問題と同じく社会問題として捉えるべきである。学校全体、学校長も含めて取り組むべき必要を感じる。カリキュラム改善や個別最適化の対応等も含め、そういう時期に来ていると感じる。

会 長 この場限りの意見ではなく、次につなげていくことが大切である。学校からの要望に応じて対応することや、こちらから提言することも必要だと思う。不登校については、学校全体で対応することが大切である。

委 員 学校で個別対応をしているが、社会問題として捉える必要があると感じる。スクールソーシャルワーカーの組織として対応できることはないかと考えている。

委 員 不登校の要因は多様である。教員として様々な対応が必要である。前提として、「学校に来ることが全てではない」という認識を持たなければいけない。決して諦めるということではなく、集団の中でしか学べないこともあるので。

「学校に行かなければいけない」という価値観の押し付けで苦しんでいることもあると思う。不安な気持ちになっている子どもの心に寄り添うことが大事である。不登校でも、家庭で家事を手伝ったり、自分で学習ができるケースもある。オンラインで学習している子どももいる。様々な学習方法がある中で、不登校でも家庭で何かできることをやれば、社会的自立につながると思う。社会的自立をどう目指していくか。

いじめが原因の不登校や転校もあるが、逃げてきたとは全く思わない。立派な選択だと思う。社会がそういう選択を許し、学校が全てではなく、今の人間関係だけが全てではないと思えるようにすることが大事である。

ただ、そのまま集団になじめないという生徒も多く、それぞれにスモールステップが踏めるよう、教師の空き時間を利用し、その時間に登校できれば良い。そういう時間も設けている。保健室登校だけでは対応が難しいので、工夫しながらその子に応じたスモールステップを考えている。

他にも、支援学級に移り、登校できるようになった生徒もいれば、友達とのつながりがきっかけで登校できることもある。ライフサポーターを活用したり、社会的自立を促し、引きこもりを防止している。

オンラインゲーム等でつながっていることもある。

会 長 不登校の児童生徒に対し、様々な選択肢が必要である。

委 員 不登校ハンドブックの内容は素晴らしい。スクールロイヤーとして、他のロイヤーの方々にも紹介しようと改めて思う。相談機関も書いており、関係機関に配布していただきたい。ハンドブックの広報を兼ねて良いとも思う。

不登校はコロナ禍の影響だけではない。小学校から中学校に入学した時に、教科担任制になり授業が難しく、先生とも距離を感じることもあるという話を聞くことがある。先生から声かけがあるというのは、子どもにとってありがたい。子どもは自分の悩みを全て言えるわけではなく、誰に相談したらいいのかというところで止まっている子もいる。大人として私たちができることは、私たち自身がメッセージを伝え続けるということ。

引きこもりになってしまった子どもに、どうメッセージを伝えるかが大切である。シンプルだがカードという方法もある。愛媛の自殺防止センターで、小さなリーフレットに詳しいことは書いてないが、ほっとしている感じの顔や、悩んでる感じの顔が描かれており、見るだけで私自身もほっとした経験がある。簡単なもので構わないので、引きこもっている子どもたちへのちょっとしたものを考えてはどうかと思う。

委 員 不登校の児童生徒が増加しているが、その理由を本人に聞いてもはっきりしないことが増えた。マスク生活が影響していることもあるのかもしれない。

ゲームで友達とつながっていることも「いいね、良かったね」と、認めることが大事である。友達が待っていて、学校に登校してきた時にふっと普通の関係に戻れるというのも当事者にとってはものすごく救いになる。不登校の子どもはつながりが少ない印象がある。みんなで、押し付けではない温かいメッセージを出し続けることが大事である。

今後の課題として、マスクを外すことを嫌がる、自分の素の顔を出すこと、ありのままの自分で他者とふれあうことに抵抗を示す児童生徒も出てくると思う。急に一斉にマスクを外すのではなく、徐々にしていくことで、少しその影響を和らげていくことができるかもしれないと思う。

- 会 長 コロナ禍以前からマスクを外せないケースがあった。
 「認める」、「つながる」、「待つ」このキーワードが重要である。
- 委 員 「徳島県不登校に関する児童生徒支援協議会」の現状と課題にある
 「学校復帰だけに限らず、社会的自立を目指し、全ての児童生徒の教育機会を確保」とあるように、かつてはフリースクールと県とで意見が対立する時代があったが、多様な子どもたちに対応するために良い意味で社会も変容してきたと思う。学校生活には馴染めなかったけれど、後に世界的に偉大な功績を残した人物もいる。
 学校に来ることが全てなのかということも含め、どうしても無理という子たちにはフリースクールや、そういう生き方もあるということ
 で焦点、視点を当てるべきかと思う。「学校だけが全てじゃない」という考えをもっておくことが必要である。勿論それが全てではない。
 もう一つ、オープンキャンパス等でも高校生にチャットで質問するとたくさんの質問が出る。授業も同じ。コロナ禍は悪いことだが、我々がこういう形で会議ができることは良かったと思う。そういうことも含めての社会のあり方、変容に対し、ハンドブックに書いてある「大人は、だれも、はじめは子どもだった。…」。子どもだった頃を忘れないようにしないといけないと思う。
- 会 長 生きていく力を備えることが大切である。
- 委 員 いろんな選択肢があっていいと思う。学校だけが本当に行かなきゃいけない場所ではない。
 大人になっても会社に行けなくなる人もいる。途中で逃げ出せず、そこに行かなきゃいけないって逃げ出せなくなって自殺してしまう人たちもたくさんいる。それを見ると、小・中学生、高校生の時に不登校になっても、いろんな選択肢があるということを知ることが将来に生かされる。
- 委 員 ハンドブックのチェックシートについて、素直に自分の感情をチェックするだけなら良いと思う。ただ、ここにチェックを入れたら、その対象になるので、自分の気持ちとは反対のところにチェックしてしまったりと、チェックの場面であっても自分の気持ちを表現できないという子もいる。そういう人たちに対してのフォローや、日々の変化にも気づいていける先生や友人、そういった変化に気づいていけるような環境を作っていくことが大事である。
 リモートより対面の授業が良いと思うが小・中学生はどうか、先ほ

ど委員さんの意見にもあったが、いろんな道を知っている方が良いと思う。

委員 不登校の生徒を担当することがある。なかなか学校に戻ってくるというのは難しいところがある。ただ、本当にみんなそれぞれ理由があり、本人も分かっていないところもあり、すごく苦しんでいる。保護者も、最初は「とにかく学校に行ってほしい」という思いが強く伝わってくる。ただ、時間が解決するところもあり、社会的自立を目指し、次のステップを自分がどうしたいのかということが一番のポイントだと思っている。別に学校に戻ってこなくても違う方法で次に行って自分がやりたいことをできる子もいる。どうしても学校というところにこだわらなくても良いと思う。

先生同士支え合いながら生徒が幸せだと思える道を探ることが大切だ。

委員 個々に応じての対応ということで、管理職の姿勢が問われると思う。様々な選択肢の中で、社会性を育成するという点では、登校促進のタイミングであったり、市町村の教育支援センターに通う子どもたちに関しては、オンラインで学習したりできないかということを検討している。生徒指導提要の改訂版についても参考にしていく。

委員 予防と対応について、本校が取り組んでいるのは、PBSといったポジティブな行動支援を実施している。子どものレジリエンスを育んだり、自己肯定感を育むという子どもたちが、「学校って居心地が良いな」とか、「友達っていいな」、「人とつながれるってとっても素敵だな」という基盤作りに力を入れている。学校に来づらくなってしまうと、後々対応が難しくなってくると思う。

友達を作ることが不得意な子どもが増えたように感じる。人間関係をつなぐということが私たちに求められていると思う。家庭との連携も大切である。スクールカウンセラーの方や医療機関の方にも助けをいただいている。

委員 児童相談所で不登校の御相談をいただくこともあり、それぞれ原因が多様で、児童生徒だけではなく、親にある場合もある。

御相談いただいた時に、治療が必要な場合もあるので、そういった見極めが必要で、早く医療につなげることや、原因に合わせた支援やフォローが大切となる。そういったところをお手伝いできたらと思う。

子どもたちに不登校になったとしても何度でもチャレンジできると伝えたい。いろんな支援の方法がある。

委員 警察への不登校の相談件数は少ないが、子どもたちのへの相談も行っているので必要な場合は相談を頂ければと思う。

会長 連携機関の一つとして警察もある。
不登校については、社会的自立を目指すことや、学校以外でも学ぶことができることや、どんなことを学んでいく必要があるのかというところで、各機関・各団体との連携が重要だ。また、それぞれで、どのような支援が提供できるのかという情報も今後必要と思う。

貴重な御意見、御提言、ありがとうございました。第2回いじめ問題対策連絡協議会、第3回審議会に今回の協議の内容をつなげていけたらと思う。1月に予定している審議会では、リレー動画を通してのつながりの大切さ、意識の高まりを検証していきたいと思う。また、「文部科学省令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」も発表されるので、報告と協議をしていただきたいと思う。